

田中親友夜学校と上田静一

白石正明

はじめに

一九〇五（明治三八）年一〇月六日、京都府から府令第三八号「尋常小学校児童に対する教育資金補助規程」⁽¹⁾が出され、貧困者の児童の就学促進のための学用品給与または貸与等への補助が決められた（施行は翌年四月一日）。続いて、翌〇六年一月一九日、京都府訓令第二号として、「学齢児童皆就学の督励に関する訓令等」⁽²⁾が出された。そこには、府下の就学率は九六・九四％に達するも、なお四五〇八人の不就学児童がいることは、「甚遺憾」で、「平和ノ克復ト共ニ国民向学思想ノ益勃興」する今こそ、この状況を変える「好機会」として、就学のための方法を各郡市長に通牒した。

一八七二（明治五）年の「学制」以来、近代日本の教育制度は、

貧しい地域の貧しい子どもたちには、変則学校、小学教場、簡易科と、正規の課程とは格差ある教育環境を用意するだけで、彼らの教育条件を整備する方向はとらなかつた。教育整備は、受益者負担と市町村・学校組合連合の責任としてきた政府が、「教育勅語」の制定と日清戦争を経て初めて、授業料徴収の廃止を決めたのは、一九〇〇（明治三三）年八月の「小学校令」（いわゆる第三次小学校令）を待たねばならない。しかも、充分な国庫補助が欠落したままのなかでの授業料徴収廃止は、市町村への更なる負担増となり、負担できない場合は授業料徴収は継続した。一方で、この「小学校令」第一章総則第一条は、「教育勅語」（一八九〇年）の一月前に出された「小学校令」（第二次小学校令）が、従来「教育初級にして」（「学制」）「普通ノ教育ヲ授ケル」（明治一二年教育令）云々の簡条に代えて「小学校ハ児童身体ノ発達ニ留意シテ道德教育及国民教育ノ基礎並

其ノ生活ニ必須ナル普通ノ知能技能ヲ授クルヲ以テ本旨トスル」とあつた条文をそのまま踏襲し、国民教化を前面に押し出したものとなつた。国家における教育の価値、あるいは効能を認識した国家の義務教育の実質化が、明治も末になつて本格化したといえた。

京都府の訓令は、この小学校令以降の政府の「義務教育」整備の流れの中にあり、従来の就学督励から一歩踏み込んだもので、この時期になり、教育の機会から疎外されていた数%の不就学児童が行政の対象として捉えられることになつたといえた。また、それは被差別部落（以下、部落と略す）に対する改善事業が政府・内務省によつて着手されようとしていた時期とも重なつていた。教育行政と、部落改善の双方から、数パーセントの不就学児童のうちの多数の層としての部落の子どもの教育状況が看過ごすことのできないものとして把握されようとしていたのであつた。京都市左京区の、当時愛宕郡の田中尋常小学校訓導上田静一が、校区内の部落内の夜学校に赴任したのは、教育行政と部落改善が新しい局面にはいつていこうとしていた〇五年十一月のことであつた。

すでに一九八〇年、私は「上田静一と田中親友夜学校」と題する小論を発表し、上田が部落の子どもの教育条件確保に奮闘し、その後改善運動に突入していく軌跡と、彼を取り巻く人びとの思いを記した。そのときは、新しい史料と史実の紹介に力点を置いたものであつた。今回は、その後知るに至つた田中親友夜学校『日誌』や『京都親友夜学校建設及河内楠公夫人遺跡再興二関スル書類』な

どの史料も使用しつつ、明治末の、教育行政の動きを視界にいれつつ、田中親友夜学校と上田を歴史の中で捉えようと思う。ただ、共同研究ゆえに、私は、教育を対象にして考察し、その叙述を中心に置くことを断つておきたい。

一 日露戦後の教育実態

1 就学率の上昇

本論にはいる前に近代日本の教育状況について簡単にふれておきたい。

一八七二（明治五）年八月二日、太政官布告第二一四号「学事奨励に関する被仰出書」が、翌日に文部省布達「学制」が出され近代日本の教育が発達した。⁽⁵⁾周知のように、そこには、「学問は身を立てるの財本といふべきものにして人たるもの誰か学ばずして可ならんや」と学問の必要を説き、「必ず邑に不学の戸なく家に不学の人なからしめん事を期す」ことを謳つた。被差別身分解放を目指す四民平等の宣言とともに、すべての子どもたちの就学を目指すこの布達には、「御一新」にふさわしい方針ではあつた。しかし、いわゆる「解放令」がそうであつたように、その内実は方針とは異なるものであつた。実施された教育は、受益者負担を軸とし、学校設置の責任を市町村・学校連合組合に課し、国からの補助は皆無にすぎなかつたために、貧しい家庭や地域の子どもたちにとって教育を受ける

ことは至難のことであつた。⁽⁶⁾ 数次にわたる教育行政の変更を経ても、教育の波及を示す重要な指標である就学率の上昇が顕著となるのは、一九〇〇年以降となつた。

就学率については、その数字は確定的なものはまだない。率の算出の分子について就学児童の特定や、入学・卒業の追跡、日目の出席率の算入の如何、など数字が不確かだけではなく、そもそも分母である学齢児童の数も、当時の出生届けや転出入届けの信頼性の無さから確実なものではないとされる。⁽⁷⁾ それを勘案しても、一九〇〇年以降となると、就学率は安定した高率を示したといわれる。『文部省年報』によると、一八九八(明治三一)年に男女平均で六八・九%であつたのが、一九〇〇年には八〇%を、一九〇二年には九〇%を超えてゆく。在校生の出席率も上昇してゆく。それを生み出した状況に次のものがある。

一八九〇(明治二三)年一〇月三〇日に發布された「教育勅語」は、天皇中心の国家統合を教育の場で実現しようとするもので、国家にとってその場の充実がなによりも必要であつたこと。また九四年の日清戦争の遂行と勝利は、教育の効用と価値を国家に実感させたこと。戦争は、国家だけではなく、遠く離れた戦場からの便りを含めた情報を渴望した国民にも、教育の価値を実感させたという。⁽⁸⁾ これに加えて、佐藤秀夫は、明治維新から約三〇年、「国民生活構造」の変化のなかで、公教育を受けることのメリット(言葉をかえれば受けないことの不利益)を実感しつつあつた民衆の教育への「希求」

を挙げている。また「小学校への毎日通学が一般的な社会慣行とみなされつつあつた」と記している。⁽⁹⁾ 「学制」世代の親の子の時期でもあつた。就学への流れは、前記のように加速していった。

一九〇〇年の「小学校令」発布の前年の四月二二日、地方官会議において、文部大臣樺山資紀は地方官会議で次のように訓示した。つまり、教育行政は地方官にとって他の「消極的監督事務」とは同じではなく、「積極的施設に属するもの多き」がゆえに、そこを大いに留意し「国家富強の基礎」を強固にしなければならない、と。⁽¹⁰⁾ 続いて七月の地方視学官会議では、樺山は、現在の六六%の就学率は「欧州各強国百分の九十以上にあるに比すべく非らず」として、明治四十年を期して「尠くも」八五%以上にするよう数値目標を挙げて演説してゐた。⁽¹¹⁾ この計画は、日露戦争を間に挟んだ〇七年には九七%を突破するにいたつた。

一八九九年、日清戦争で得た賠償金の一部を教育基金にまわすことが決められ、〇〇年三月には、九〇年からわずかに位置づけられていた国庫補助が、「市町村立小学校国庫補助法」として提出され、教育の受益者負担の方針が転換する一步となつた。そして、同年八月の、「小学校令」では、はじめて尋常小学校での授業料徴収が基本的に廃止されることが記された。それまでの就学督励の制度的整備とあいまって、「義務教育」整備の体制へ向かつたといえた。

各地の地方長官による就学督励は、日清戦争後の顕著となり、一九〇〇年前後のそのピークをみたという。⁽¹²⁾ 文部省も、就学督励をす

るとともに、「就学児童の増加せる今日においては」「学校の組織十分ならざるがために躊躇するが如きは甚だ取らざるところなり」と半日学校の活用などを促していた⁽¹³⁾。その中で、数パーセントの子どもが、それでも不就学のまま残された。

2 京都府の状況

次にこの間の京都府の教育状況をみてみよう。一八七五(明治八年)一月の就学督励に関する布達に始まった京都府の就学督励は予期の成績があがらぬままに推移したが、九九年一〇月府訓令第一八四号は、就学督励と猶予免除手続きを府下各郡・市・町・村長、市町村立小学校長、学務委員に発した。第一八四号では、就学の目標を八五%とおき、調査結果を府に提出することが決められた。就学率は、九六年の七三%から、七七、七八、八二と増え、〇〇年には、九一%に達した。⁽¹⁴⁾ 〇〇年の小学校令改正に基づき府は九月に府令第八五号で、学齢児童就学に関する細則を定め学齢児童の把握と就学に遺漏がないようにした。⁽¹⁵⁾ 各地の就学督励と同様の動きであったといえよう。就学率は、〇一年が、九三%となり、〇五年には九五%を超えたことを統計は示していた。⁽¹⁶⁾

京都府は国の目標の遂行に成功していたといえるが、義務教育の四年から六年への延長が日程に上り(〇八年実施)、また日清戦争にもまして国家を挙げての戦争であった日露戦争を経て「人心の興奮」下のこの時期を、府当局は普通教育の完全実施の絶好の好機と

捉えた。最後の未就学数%をなくすため、「貧困者の児童」を対象にした具体的施策がとられることとなった。それが、〇五年一〇月の府令第三八号「尋常小学校費補助規程」であり、翌〇六年一月の京都府訓令第二号とその通牒であった。

前者は「貧困者の児童」への学用品の給・貸与のための補助金を設置者である市町村または学校組合に給付するといふものであった。後者の訓令は、九六・九四%の就学率から漏れた四五〇八人に注目することを求め、「思フニ今や平和ノ克復ト共ニ、国民向学思想ノ益勃興スベキハ必然ニシテ、真ニ得難キノ好機会タリ。各郡市町村ニ於イテハ此機会ヲ逸セス、百方適応ノ手段ヲ講ジ、一層ノ励精ヲ加ヘ以テ学齢児童皆就学ノ成績ヲ挙クルニ力ムヘシ」とした。学籍簿の整理や学用品・食費の手当てのみならず、特別教育の項として次のように記していた。⁽¹⁷⁾

い 他の児童の教授に差支えなき限り子守のまま出校せしむること

ろ 小学校内に子守教育丁稚教育を施すこと

は 小学校令第三十六条但書の趣旨により日曜学校又は夜学校を設けること

に 製造場又は工場等にして多数の学齢児童を雇傭する場処には相当の教育方法を設けしめ之を監督すること

ほ 土地の状況により巡回教授の方法を設けること
へ 通学不便の地にありては分教場を設けしめ其一分教場を構

成する能はざる部落の児童は便宜寺院等に於て小学校令第三十六条但書の趣旨により教育を受けしむること

と 貧困なる部落の児童には正教科の傍適當の職業を授け多少の賃金を得しむるの方法を取ることに

ち 盲啞等の不具者もなるべく学校に收容し正教科時間外に於て便宜適應の教育を施すことに

文中の「小学校令第三十六条但書」とは、〇〇年「小学校令」の「学齡児童保護者ハ就学セシムヘキ児童ヲ市町村立尋常小学校又ハ之ニ代用スル私立小学校ニ入学セシムヘシ但シ市町村長ノ認可ヲ受ケ家庭又ハ其ノ他ニ於テ尋常小学校ノ強化ヲ修メシムルコトヲ得」⁽¹⁸⁾を指す。この条項の但し書きの趣旨を拡大活用したこの訓令は、従来の就学督励の細則が、就学猶予の取り決めの厳格化という、いわば、不就学を許さないという取り締まりが中心であったものから、就学を増やすための方策を明示したものとなった。

(い) から (へ) はかつての子守学校等簡易なものから、九四年一月の文部省訓令第一号で法制的な基礎が認められた主に増加する若年労働者のための夜間学校までの、変則的教育形態の活用をすすめるものであった。また (と) は、綴喜郡八幡町東林部落の児童のための八幡尋常高等小学校の分教場で実行されていた方策であった。⁽¹⁹⁾ (ち) は、従来教育猶予と免除としてくられた障害児に対するものであった。⁽²⁰⁾

就学を増やすために様々な形態が、「特別教育」の名で認められ

ることとなった。これは、正規の教育を受けられない児童の現実を括弧にいれたままの、つまり現実をそのままにしたうえでの、いわゆる「現実的」な弥縫策であり、「社会的不就学層を、国家の教育の枠組みに取り込む」義務教育の部分的再編⁽²¹⁾と指摘されるものである。また、朝治武の論文にあるように、この訓令が出された時期は、部落内で取り組まれていた改善運動が、内務省主導の部落改善事業へと把握されていくときであった。⁽²²⁾ 部落問題が看過できない重要課題として政治的に捉えられていった時期と、軌を一にしていることを忘れてはならない。それらを踏まえたうえで、それでは、実際に教育から放置されていた子どもたちに関わり教育現場で、この方策に沿って教育活動を展開していった実践者にとって、どのようなものであったのか。以下、私は、上田静一の行動をたどることで、その疑問を解いていこうと思う。

二 夜学校の開設

1 上田静一の赴任

一九〇六(明治三九)年十一月、京都府師範学校を三月に卒業し、愛宕郡田中尋常小学校訓導となつたばかりの上田静一が、同小学校を校区とする田中部落の夜学の教師として赴任した。⁽²³⁾ 上田は、一八八四(明治一七)年三月四日、上田貞逸・矢田リキの四男として、大阪府南河内郡東条村大字甘南備(現・富田林市)に生まれた。⁽²⁴⁾ ま

だ二二歳の青年教師であった。彼は師範学校の教生（教育実習）を京都府下愛宕郡鞍馬口小学校でおこなっている。⁽²⁵⁾ 彼が幼少のころ離婚し他家に去った母親に代わって上田を育てた祖母の思い出を、後年上田は「峯城幸平妻ます略傳」に記したが、それによれば、富田林の生家近くに部落があり、祖母は上田に部落民を蔑視排斥するようなことはならぬ、と教え、父もまた彼らと交際していたという。⁽²⁷⁾

上田が教育実習先に貧民部落といわれた同小学校を選んだ経過は不明だが、彼の少年時代の祖母たちの教えが影響していたのかもしれない。というのも、教育実習の過程で、彼は「貧民の苦境と教育の微々たる現状」を見、「貧民教育ノ念勃然トシテ起リ」、卒業時に赴任地の希望を「府下第一の貧民地に行きたい」⁽²⁹⁾と答えるにいたるからである。三月末卒業した上田は、同月三十一日、志望どおり大規模部落を校区にもつ田中尋常小学校に赴任した。⁽³⁰⁾ 訓導となった上田は六月からの六週間の兵役も終え、⁽³¹⁾ 教員生活にもどった。

当時の田中尋常小学校は八つの字を校区にもっていたが、全戸数八一〇戸のうち、田中部落が四五〇戸を占めていた（『夜学校沿革史』）。同小学校の〇六年当時の児童数は四学年で、男子一三〇名、女子一二二名の計二五二名。⁽³²⁾ 〇八年は六学年で、男子二一名、女子一四二名計三五三名であった。⁽³³⁾ ただし学齢児童総数は記載されていない。一方全戸数の過半数を占めていた田中部落の子どもの就学状況は、〇八年度で、就学・男子一〇七名、女子六〇名の計一六七名、不就学・男子八三名、女子一〇五名の計一八八名、就学率は、

男子五六・三二%、女子三九・六六%、平均四八・三五%とある。ただ、無寄留、出産届遅児童「約三、四十名あり」とされ、日々出席率は三五・九五%（『夜学校沿革史』）。ここから、田中部落は、小学校でも児童の過半数を占めていたが、しかし、就学児童を超える不就学児童がいたことになる。

府下の就学率は前記したように〇六年は九六・九四%であったが、⁽³⁴⁾ 〇八年には、九八・九二%となっていた。この中での田中部落の児童の就学率五〇%以下であった。「歴代校長職員村長篤志家等」による就学奨励がおこなわれたが、その内容は、校長職員の家庭訪問督促、出席児童の表彰、警察官の家庭訪問督促、篤志家の学用品給与など（『夜学校沿革史』）にすぎず、効果はなかったといえる。上田が赴任した当時の状況はこのようなものであった。だが、田中部落自身が、このような状況に不満をもっていなかったわけではなかった。教育行政に期待ができない中で、部落みずから教育環境の整備への取り組みがなされていたのだった。その動きをたどってみる。

2 夜学校開設前史

部落の子どもたちのための教育施設が最初に計画されたのは、一九〇〇（明治三三）年のころであった。当時（一九〇二年調べ）の田中部落の状況は、戸数二四戸、人口一二九四人。生業は、道路修繕・河川からの「バラス採取」・履物直し・人力車夫・青物行商。⁽³⁵⁾ 子どもたちも貴重な働き手であり、子どもたちへの就学督促は現実

の生活のなかで効果のないものとなっていた。だが、時勢に遅れたままでは部落の存亡に関わると考えた部落の有力者浅井清三郎（のち村会議員・質商）、早瀬円蔵（同・皮革商）らは、「出来得る丈多くの子弟に文字を教える好い方法」として、分教場の設置を思いついた。そして、費用の一部を負担するから田中部落内に小学校の分教場を設置して欲しいとの要望が出された。すでに働き手となっている子どもとの便宜と、学校での差別のため通学しない事態を解消するための方策であった。だが、この要望は、ほかの地区から「部落のみそんな特典を与える」ものだとの苦情から立ち消えとなった⁽³⁶⁾。

さればと浅井らは、分教場設置費用を自分たちでまかなうことを決意し、資金調達の教育補助無尽頼母子講をたちあげた（一九〇〇年九月）。そこから得られる利潤で教員の手当を支払うこと、分教場は本校内に設置し、教育対象は（本来本校に通学すべき児童ではなく）学齢超過した未就学者あるいはその他の希望者のための夜学とすることを提案して、〇一年夜学校が開設された。だが、通学生は少なく、翌〇二年この夜学校は挫折した⁽³⁷⁾。

夜学は頓挫したが、浅井らは〇三年に第二教育講を組織している。部落のなかで頼母子講は、教育講だけでなく、寺や浴場などの維持のために講がつくられていた。浅井は〇〇年から一〇年にかけて一組の講を組織していた⁽³⁸⁾。この頼母子講は「取り退き無尽」とよばれるもので、会員五〇〇名で構成し、一人あたり毎月一元を掛け、八〇ヶ月で満満となる。その間毎月一人に抽選で一〇〇円を渡し、

あとの四〇〇円を貸付や預貯金で運用して利潤を上げ、満満の際に講員全部に利潤をつけて還付しようというものである。講員への利潤のほかに運用で得られるであろう利潤を教育なり寺の維持にあてようとするものであった。浅井の講の構成員は、田中部落だけでなく、他の部落や京都市内、滋賀県の人びとを含む大規模なものであった。講元である浅井の人物と手腕を信用した上での組織であった。

講が持続されているなか、〇六年、三度目となる部落のための教育施設設置の動きが始まった。この三度目の設置機運のきっかけのひとつに日露戦争とその勝利があったという。「日本といふ国家が、世界といふ大きな地球の中に名を揚げて、孰れの国よりも偉くなった」との高揚した意識が部落の有力者にも及び、その気持ち教育へと向かったという⁽³⁹⁾。教育講は、その利益からまず田中尋常小学校の改築をおこない、続いて、今度は部落内での夜学校設置を要求した。

〇六年、田中尋常小学校には、前述のように、幸いなことに貧しい子どもたちの教育を希望していた上田が赴任していた。上田は、六月からの兵役も終え職場に戻っていた。浅井らは木村弥一郎校長ともはからい、場所は部落内で、夜学で、教授は上田が担当することとなった。校舎は、間口三間、奥行四間半の二階建て民家を教育講で購入した（『夜学校沿革史』以下断りのないものは同史料による）。

上田の身分は、田中尋常小学校訓導のままで夜学主任の役職となった。夜学手当のとして本俸とは別に三円が、当時青年補習教育費

として町村に配分されていたものから支給されることとなった。だが問題が生まれる。というのも、田中村内の四箇所の村営青年補習夜学は本来半年開講となっていたが、新たに開かれる夜学校は、学齢児童も対象とするために通年開講となる。それでは村の公平を欠くということであった。そこで、夜学校は、村立ではなく私設となった。だが、上田の本俵は田中尋常小学校からであり、夜学手当の出所はそのままとなった。しかも、夜学校の学齢児童の修了・卒業は田中小学校で認定し事務処理も同小学校でおこなうこととなった（『夜学校沿革史』）。

夜間日曜日等の変則学校の修了者への卒業認定に関しては、一八九四（明治二七）年一月の文部省訓令第一号で、卒業証書等を望む者には、校区の尋常小学校が試験のうえで、授与する権限が道府県に与えられていた。⁽⁴⁰⁾ 田中の夜学校は、この訓令の外にあったといえる（後述）。

このような変則が認められたのは、〇六年の京都府訓令の「特別教育」の方針によるものであったと考えられる。部落の人びとの熱意は、上田の着任と、そして制度の追い風で夜学校開設へとこぎつけた。

3 夜学校の出発

〇六年一月一日、夜学校が開設された。名称は、夜学場とされ固有名はない。学校の教育精神は、三つあり、至誠一貫、向上融和、

師弟一如とされた。学校の目的は1、不就学児童の皆就学を期する事。2、男女青年補習教育をなす事。3、陋習を改め社会改善をなす事。（上田が教育方面だけでなく、夜学開設当初から田中部落の改善に関心をもっていたことの詳細は朝治論文参照）

夜学校の教育対象は、学齢超過の青年（尋常小卒または未卒）および学齢児童で、前者は青年教育部、後者は小学教育部にわけられた。教科は、両部とも（小学校令に基づく）国語・算術・修身・唱歌・体育とされた。教科書は小学教育部は尋常小学校教科書で教授されたが、青年部は算数が高等小学教科書とされた以外は「適当選択」とされている。授業日数は小学校に準ずるとしたが、毎日二時間では、毎週一八から二八時間の間までとされた小学校第一九条にも満たないが、同条の「但し半日小学校に在りては此の限りにあらず」⁽⁴¹⁾を使っただけであろう。小学教育部には修了・卒業はあるが、青年教育部にはない。学校の日常的な維持経費は、青年・児童の分担とされた（具体的数字は不明）。

出発時の生徒数は、青年部に男子一六名、小学部に男女三〇名とある。ランブ四個が点灯され、生徒が出金して購入に大火鉢一個を備えての出発であった。

当初は上田の家庭訪問による呼び出しにも拘らず出席は芳しくなかったが、年を越え春になると、状況は徐々に好転していった。四月から、上田は夜学校の二階に居を移し、部落のなかでの生活を始めた。

『夜学校沿革史』は〇七年から〇八年にかけて、図書室や運動場が設置されていく模様だけでなく、図書や学用品、上草履、白墨、ジウウロの寄付まで事細かに記載している。その記載の綿密さは、それらのすべてが、心こもるものであり、それらが感謝をもって受け入れられたことを示している。生徒児童もまた、相互散髪で節約した金や、廃物回収・売却して得た金を夜学校設備経費に提供している。夜中に寝ている上田の枕元に紙につつまれた五〇銭硬貨が⁽⁴²⁾おかれることもあった。

このような夜学校をめぐる動きは、地域外にも知られたのか、大学生たちの関心と呼び、彼らから寄付（理髪器具や書物）がよせられるだけでなく、七月になると、毎週土曜日に大学生による「社会的知識の涵養」と題した講座がもたれることとなった。京都帝国大学、同志社大学、真宗大学（現在の大谷大学）の学生5名が交互に分担している。〇七年には、田中尋常小学校准指導の平山ぬいが裁縫教師となり青年女子に裁縫を教えることとなった。⁽⁴³⁾ぬいは、上田よりも半年前の〇五年一〇月に同小学校に着任していた。彼女は、京都三条河原町教会で孤児・貧児のための慈善活動をしていたブロー・メリーらのイエズス会が設立した京都和洋技芸学校と、教員養成所の出身のクリスチャンであった。⁽⁴⁴⁾

熱意が好意に報われていく、播種期の明るさがこの時期の『夜学校沿革史』に溢れている。〇八年三月には第一回の修了卒業式がおこなわれた。

〇八年一月には、〇六年一一月の開設当初から検討されていた青年団が結成され、上田が会長となった。結成後の七月、「田中村の矯風事業」と題して、上田と夜学校が新聞で報道された。そこでは、今後田中部落は紀伊郡柳原部落の矯風会を倣って改善活動が計画されていると記された。⁽⁴⁵⁾同一〇月一四日、京都府知事大森鍾一が、田中部落視察の折に夜学校を視察。「戊申詔書」（二〇月二三日発布）の趣旨にそった改善組織「自強会」が二月二〇日に部落で発足し、⁽⁴⁶⁾翌〇九年一月二二日発会式が、大森府知事、兼田義路愛宕郡長、庵谷島太郎下鴨警察署長らが参列のもと挙行された⁽⁴⁷⁾（朝治論文参照）。村長小西源吉が会長、早瀬円蔵ら有力者が委員に、そして木村弥一郎田中尋常高等小学校と上田が顧問となった。会の事業の一つとして、夜学校の拡張が決議された。⁽⁴⁸⁾「戊申詔書」を奉ずる改善事業の中に夜学校は位置づけられたといえる。

〇九年一月早々の五日から『大阪朝日新聞』京都附録は、「貧民の教育」というシリーズを始めた。田中の夜学校に関する記事がその第一回から第九回にわたって掲載され、夜学開設までの歴史と、学校での授業の様子などが細かく報道された。⁽⁴⁹⁾

そして同じ〇九年一月、教育講によって夜学校校舎建築が計画されるにいたった。そのうえ、従来児童・生徒の負担であった夜学経費も以降、講会から支出することがきめられた。「京都市編入町村引継書類」によると毎年一五〇円が講会から支出された。さきの「自強会」では、夜学校の拡張が決議されたが、「会」が関与した形跡

はなく、講の負担による仕事であった。

三月二回目の修了卒業式。前回と同じ青年部三一名、小学部三二名（前回は三〇名）とある。同月三十一日、上田は京都府から教育功労者として表彰された。

○九年度四月から、夜学校生徒の広崎政吉、松下清十郎、吉田仙二郎らが、上田を助けて授業をおこなうようになった。⁽⁵⁰⁾同志社大学や京都帝国大学の学生の講話や劇上演も続けられていた。⁽⁵¹⁾五月には、上田の母校である京都府師範学校長鈴木光愛が夜学校の視察にやってきた。また、六月には中国（清国当時）の学校関係者の訪問もあった。⁽⁵²⁾

現在わかっている○九年四月以降の田中親友夜学校『日誌』には、夜学出席生徒数がほぼ毎日記されているが、おおよそ生徒四〇人前後が出席している（ただし、新校舎移転後はこの記録は減少していく）。そして、○九年度五月、夜学校敷地が購入されるに至る。従来の夜学場と道をへだてた畑地二五〇坪で、七七一円九銭である。七月青年生徒二〇名が毎夜二時間交代で地上げ作業に従事、八月には、八六名が二日ばかりで加茂川から砂利を運び校舎の地盛りをした。八月五日、建築開始、三〇日上棟式、そして、十一月一日校舎は完成した。⁽⁵³⁾

4 命名―親友夜学校

完成した校舎は、南北一〇間、東西二〇間の矩形の土地に、続き

の三教室とのはなれの一教室がならんだ。いずれも南向きで、教室は（用務員室兼用の離れを除いて）三間から四軒四方である。一階が教室、二階が上田の居室である（二階の広さは不明）。⁽⁵⁴⁾いままでの夜学場とは一変した学校校舎である。

土地代を含めた工費は、総額四八一五円七〇銭五厘。すべて講会から支出された。但し『京都市編入引継書類』によると、五六五四円四〇銭とある。

校舎完成に従い、不就学学齡児童一〇〇名が新たに入学した。不就学児童のかなりな部分を受け入れられることとなったといえる。それにもない、教員も三名増加した。京都市錦林小学校訓導小林悦三、平山改め上田ぬい（二月二七日結婚）⁽⁵⁵⁾が教員として、それに夜学場出身の前記広崎政吉が代用教員と採用された（小林が本務校訓導の身分のままか否かは不明）。青年男子部は上田が、同女子部はぬいが、小学部一、五、六年を小林が、二、三、四年を広崎が担当となった。

一〇月の田中村村会は、教員一名の増員につき、毎月五円を五ヵ月分手当補助することを採択している。⁽⁵⁶⁾

一九一〇（明治四三）年一月一七日、夜学新築校舎の落成式が挙行された。大森府知事代理の和田不二男京都府視学、兼田愛宕郡長や近隣村長、小学校長、田中村関係者、ほか村民などが列席した。

このときに、夜学場は親友夜学校と命名された。

一〇年一月時点での田中尋常小学校の児童数は、四七二人である。⁽⁵⁷⁾

三月の親友夜学校の小学校児童数は一三二名である。二五〇坪の敷地に立つ新築四教室の二階建て校舎に本校の三五％にあたる数の生徒が通う、学校といつてよかった。前記の村会での教員手当補助採択の際の、議長の請願説明には（夜学校の新築落成は）「義務教育年限中のものにして登校せざるもの悉皆収容し、従来不就学児童に就学を奨励し、歩合を保つこととなしたれば」とあった。親友夜学校の発足は、不就学児童として受け皿として整備されたといつてよかった。

朝治論文にあるように、夜学校校舎上棟式後の九月、醇成青年団が発足し、上田は、副会長となっていた。親友夜学校校舎落成式の出席者の賑やかさから、親友夜学校の注目度が推し量れ、同時に上田の改善事業の場での名前が上がっていったと思われる。

『夜学校沿革史』には、秋田県庁事務官の視察、貧しい児童のための東京市特殊尋常小学校の一つである東京市鮫ヶ橋尋常小学校長の授業参観、京都府視学、愛宕郡長をともなった文部省視学官が視察に来校したことが記されている。一二年二月には、田中村から年額二五〇円の補助が寄せられることとなった。⁽⁵⁸⁾

ほそぼそと始まった夜学は、親友夜学校と称するゆるぎない存在となったようにみえた。

『日誌』をみると、夜学と改善活動に多忙な上田の姿が伺える。

また、辞書を欲しがっていた生徒のために、内職で得たなかから辞書購入し、「頑張りなさい」と生徒を励まし、昼も夜も裁縫を教え、

上田を助ける妻ぬい⁽⁵⁹⁾。教え子から上田を助けるまでになった青年たち。後年（一九三七年）建設された「上田静一先生之碑」（後述）に、「学ブ先生教ユル先生、薄暗キらんぶノ下ニ一如トナリテ勉学ニ精根ヲ傾ケシ」と、教え子が思い出す学校生活であった。

親友夜学校は、田中部落の人びとと上田の「苦心の結晶」⁽⁶⁰⁾であった。上田が幼いころ他家へ嫁いだ実母が、そのころ夜学校に静一を尋ねている。彼女は、部落の中に住み込んで活動する息子夫婦に驚くが、静一の決意を聞き、次のように彼を励ました。⁽⁶¹⁾

嗚呼善き事を思ひ立ちぞ堅実^{シツカ}やつておくれ。思へばお前の父も人に情をかける人であった。小作人達が不作であると言へばお前達が都合のつくだけでよいと言ひ、世帯が困るで五円融通頼むと言つて来る人には十円持たせて帰らす人であった。そうそうまだお前が生れぬ前、南新堂の靴屋が暮れ方来て、私等は身分違ひの者故何れへ行つてもお泊め下さるはづもなけれ、軒下でも小屋にで、もと言ふを、トウサンは同じ人間だと言つて、お客同様にして泊めてあげた事もある。お前はトウサンの心を受けたのよ、心ばかりでなく姿もだんだんよく似て来る母からの賞賛と激励を上田は忘れることはなかった。

三 親友夜学校の歩み

1 運営の実態

夜学校が開設され、その未来に自信を深めた学校関係者たちが、夜学校の充実を目指して校舎建設を決意したのは、前述のとおり、開設から二年余りたった一九〇九（明治四二年）一月のことであり、実際に敷地を購入したのは五月、夜学青年生徒たちによる敷地整備がおこなわれたのが、八月一日のことであった。そんな日々が続く六月二九日の田中親友夜学校『日誌』には次のような光景が綴られている。⁽⁶²⁾

本日光明月を踏みて加茂川堤に散歩す。男生徒駆けくらべ、女生徒の優美なる唱歌、何れも楽しく散歩せり、出発八時半帰校十時なりき

夜間であることを除けば、このような光景は、通常の学校生活では普通のことであつたろう。しかし、子どもとして十分な保護をうける生活もなく、教育の場から疎外されていた部落の子どもたちにとっては、それまで体験することのなかった楽しい時間であつたろう。月明かりの下、楽しげな子どもの風景を見つめる上田は、夜学校の前途に光をみたであろう。

だが夜学校の発展は、皮肉なことに、その脆弱な基盤を暴露していくこととなった。夜学校校舎の完成（二月）に従い、学齢不就

学児童を百名入学させ、教員三名が増加したことは既に記した。だが、そのうちの一人は、従来からの上田ぬいであり、増員教員の小林悦三は病欠を繰り返す状態で（田中親友夜学校『日誌』参照）、結局小林は、一九一一年九月に退職⁽⁶³⁾、実際は夜学卒業生の広崎政吉一人の増員であつた。田中親友夜学校『日誌』には、教員の遣り繰りが連日のように記されている。増加した児童生徒数に対して、不就学児童の解消を政策に掲げている府・村当局からの協力は、小林訓導の派遣だけであり、夜学校生徒拡大への措置はとられなかった。上田にとって、出席生徒数の把握も荷が重くなったのか、田中親友夜学校『日誌』に克明に記されていた出席者人数の記載は、翌一九一一年一月の夜学校校舎落成式以降に消滅している。

この増大した生徒数をもたらした問題は、新任教員の招聘や、夜学卒業生の応援でなんとか遣り繰りしたが、「生徒多く混乱⁽⁶⁴⁾」の状況は打開されなかった。だが、夜学校の拡大にもなつて、新たにもたらされたのは、他にあつた。それは、教育行政による管理の問題であつた。

先に述べたように、親友と命名された夜学校は、私設であり、特別教育であつたが、教員上田は、愛宕郡田中村立田中尋常小学校訓導で、村内の夜学主任の身分である。そのため、田中親友夜学校『日誌』には、親友夜学校以外の村内の夜学に上田が赴いている記事が散見される。また、変則的な特別教育であっても、この夜学校で履修卒業した学齢児童は、本校である田中尋常小学校卒とみなさ

れていた。だが、『夜学校沿革史』の一九一〇年四月からの新年度の項に、「本校入学生徒の整理」として、青年部、小学部それぞれの対象者を記すなかで、小学部は、「尋常小学未卒業の学齡児童にして当校に入学を許可すべき貧困者の限定。町村長の証明ある者を入学せしむること」とある。また、「元来当校に於て国家の義務教育を卒へしむるは特別扱ひなるを以て其の筋の認可を得るを要す」とも記されている。

ここから伺えるのは、児童生徒が少人数のときは、夜学校関係者にさせていた入学・卒業に関する管理を、本校の約三分の一に迫ろうという規模になったからには、公的な教育行政機関の管理下に置くという、行政の方針であった。生徒集めも、校舎の建設・管理も、運営費の大部分の負担も、部落の教育講と上田の奮闘に丸投げ状態でありながら、一方で児童の資格決定は行政の監督管理下におくこととしたのである。それでは、夜学校を私設から公設へと変更し、教育環境の整備を始めるかという、その方針はなかった。わずかに、この年度末になって、村当局は、夜学校への補助金二五〇円を支出した。そして、三年後の一三年八月、この補助金を道具に、田中村当局が夜学校の運営自体の管理に乗り出し、大問題となるのは後述する。

この時点での行政からの管理強化に、上田は反対の意思を残していない。彼が管理強化に気づいていなかった訳ではないのは、田中親友夜学校『日誌』の一九一一年一月二六日の条に表れている。

その日、内務省の役人が京都府と愛宕郡の役人と共に、夜学校と田中村の視察に訪れた。上田は彼らに村内を案内し、夜学の経営目的方針などを語った。それに対して「彼等役人は諸種の統計を要求して帰れり」。この記事には、夜学校を誇る上田と、統計を提出せよ、と答える官僚との関心のすれ違いがあり、そのことを上田は日誌に書かずにはいらなかったのだ。管理の足音を、明確には把握できなかったが、上田はうつすらと感じたのであろう。だが、この時点の彼には、管理をかわして、学校を自分たちで運営していけると自負があつたのだらう、それ以上の感想は述べていない。朝治稿にあるように、部落内改善事業・青年団の幹部でもあつた上田は、自分を軸として、親友夜学校を育て守り発展させていけると確信していたであらう。彼はまた、一介の訓導であるとは自身思っていなかったようだ。彼は、校長はもちろん、村長を越えて、郡視学や郡長や府知事に認知されていると考えるほどの、夜学校と自身の高い評判の中にいたのだから。地元紙『京都日出新聞』に、「西田中親愛夜学校⁽⁶⁵⁾の好先生「模範的教育家」と題し、名前を挙げて、上田の略歴と夜学校運営の成果が掲載されたのは、一年の五月のことであつた。それからほぼ一年後、一二年五月に、夜学校をめぐる状況は一転する。

2 教育補助頼母子講会頭引継ぎ問題

一九一二（明治四五）年五月二五日、教育講補助頼母子講会頭の

浅井清三郎が病死した。まだ四五歳の若さであった。上田が夜学に赴任するずっと前から、部落の子どものための教育に腐心し、努力を重ね教育補助頼母子講を組織して夜学の財政を支えた浅井の死は、夜学校の「遭難時代」(「夜学校沿革史」)の幕開けとなった。

浅井の容態が重篤であることを知った上田は、浅井の教育功績表彰方を府当局に申請し、また講の将来を郡長に相談していた。⁽⁶⁶⁾浅井の葬儀は盛大に執りおこなわれ、会葬者の列は数町に及んだという。⁽⁶⁷⁾浅井が取り仕切っていたがために、教育講の継続計画は難航する。

この時点で教育講は一一組あり、内七講が、田中部落で、四講が柳原部落を主な拠点として運用されていた。⁽⁶⁸⁾浅井清三郎の遺産をついだのは娘の静である。一八六八(明治二一)年生まれで、京都府立第一高等女学校卒業後、清三郎の講会を事務員として手伝っていたが(「親友夜学校関係者略歴」「夜学校沿革史」)、清三郎が亡くなったこのときは既に、京都府紀伊郡の柳原部落の有力者に嫁いでおり、田中の部落をはなれていた。清三郎が四講を柳原でひらいていたのも、浅井家と柳原部落との関係を伺わせる(結婚後のせいの本名は、藤岡せいだが、上田の田中親友夜学校「日誌」には、浅井と旧姓で記されており、私も浅井せいとして叙述することとする)。

上田の田中親友夜学校「日誌」によれば、上田は清三郎死去の直後から、浅井遺族と相談を繰り返している。⁽⁶⁹⁾教育講に関する権利と義務は、会頭の清三郎が握っていたが、今後、講の財産と、講運営の責任をどうするかが問題であった。浅井せいが、清三郎の権利も

義務も引き受けるのか、清三郎とともに当初から夜学校設置に尽力した早瀬円蔵が責任者となるのか、それとも、複数人の共同責任とするのか。その討議は二転三転し、郡や警察からの講責任者決定の催促の中、田中部落内部の人間関係の軋轢の露見、柳原部落と田中部落の複雑な関係等の生々しい問題が、講の責任の重大さという問題と絡み合っており、複雑になっていた。上田はそれを田中親友夜学校「日誌」に克明に記している。その内容は、当時の部落の生活実態を映し出しており、史料としても興味深いが、紙幅の関係上、それは参考資料に譲り、本稿では概略を追うだけとする。

夜学校存続のために、教育講の安定を願う上田は、浅井せいと田中部落の有力者たちの間を奔走する。上田は彼らに次のように説いている。

すなわち、本村内下層教育の盛衰は本夜学校の盛衰にあること、本夜学校の盛衰は基本筋の有無即ち講法を完全に成すか成さざるにあること、夜学校は本村にあり、又本村内の師弟を教育するものなれば、本村内に夜学校の実権を握る講の責任者をおかなければならない。現在、故人となった会頭の親戚は他村にある。ここで、村の有力者が会頭を引き継がなければ、「村内有力家は何の面目あつて村人及び社会の人に接するを得ん」⁽⁷⁰⁾。

一度は共同であればと会頭就任を受けた早瀬を含めて、上田の説得に有力者たちは即答をされた。ところが、約一週間後、早瀬は、実は会頭の故清三郎と意思疎通ができていなかったと、二人の不仲

を吐露、自分が不仲の人物の死後にその後釜にすわると、遺族の邪推を招きかねないと、会頭就任を渋りだした。教育講のトップの周辺で、そのような対立があったことを初めて耳にした他の有力者たちは、講の実情に不安を抱き尻込みをはじめた。これに対して、上田は、こんな事態なのだから、「私情も私怨も水泡二流して、村の教育夜学の発展を中心に」割り切らなくてはならない。「私事は小事、公事は大事」、私事の小事を捨てなければ事態の解決はできない、と説いている。しかし、有力者たちは「しばし互に黙考」とあ(71)る。それだけでなく、その席上で、上田が京都府庁に清三郎の表彰を願い出たことも、府と上田が通じていると批判がなされた。早瀬らに相談なしでの行動への批判であった。

上田は有力者たちを叱咤激励した翌一六日、その会合の結果（つまり有力者が引き継ぐこと）を郡役所と浅井せいに報告し、せいは「村を愛し夜学の為めを思ひ正意誠心公共の為に尽して下さる人なれば何の異存も御座いません」と同意した。(72)

だが、この時点で郡長からは、講の責任者として、早瀬を含めた田中部落の有力者三名と、せいと、そして、せいの嫁ぎ先の親戚にあたる柳原銀行頭取の明石民蔵にしたらかとの打診が上田に寄せられた。(73)

郡長からの打診を上田は、せいに伝えたが田中部落の有力者には話していない。が、最初のせいと有力者の協議に欠席した早瀬は、責任者になることを断るにいたる。(74)

村の有力者たちの躊躇は、人間関係の好悪だけではなく、清三郎が差配していた教育講の内実を知らされていなかったことにもあつたろう。頼母子講は、不特定多数の人から金を集め、それを他に貸し付け、利息とともに回収、利益と元金を出資者に返す仕組みである。しかも、教育講は前述のように、満期途中でも抽選に当たれば出資金の一部が還ってくる、いわば富くじ付であった。富くじの存在で出資を募るといふ、危うい要素を含んだものである。講の運営の肝心な点は、当然、融資先の確保と融資の回収である。主に、担保も差し出せない零細な庶民への貸付であるからには、講の運営には、焦げ付きを惹起させない、講元の（目に見えない力も含めた）手腕にかかっていた。教育講は各組それぞれ累計すれば数万円の規模で運営され、(75)質商である清三郎の下、講として利益を上げ、夜学校へ膨大な援助をおこなってきたのであつた。だが、彼なき後、講の運営は大丈夫なのか。それを判断する情報をもたない、しかも、頼母子講というものの自体の事情に通じた有力者たちが躊躇するのは不思議なことではない（上田は講運営には不案内であつたと思われる。彼が頼母子講の法・条令を検討したのは、一四年九月になってからである（後述））。

そのうえ、有力者たちは、この頃には、教育講はさておき、田中部落での頼母子講組織に不透明なものがあることを知っていたと考えられる。少なくとも有力者の一人は講を危うくしていた当事者であつた。

兼田郡長が上田に部落の有力者明石を推薦し、警察が講について上田から事情を聴取していたのも、教育講の行く末に疑念をもっていたことを示している⁽⁷⁶⁾。

教育講の引継ぎは二転三転し、やむなく一応、浅井せいがするということ、問題は先にすすまず、講はそのままの状態となった。ただ、上田や有力者たちは、講からの借金の返済を滞納している債務者に、金の取り立てに従事することを決める。上田は、最大の債務者に早速取り立てに出かけていった⁽⁷⁷⁾。

上田が奔走している時期は、明治天皇の死去の時期（七月三〇日）と重なる。天皇の危篤、死去、九月一三日の青山葬儀場での大葬。そして、京都桃山御陵での埋葬のため、一四日を回った深夜、遺体は青山葬儀場に引き込まれた線路から列車にのせられ、京都へ向かった⁽⁷⁸⁾。田中親友夜学校『日誌』から、講問題を抱えつつ上田が、この間の天皇の様態に関心を寄せているのがわかる。

一四日午後、上田は京都駅に到着した天皇の棺を迎えに出かけている。その朝、上田もまた多くの国民と同様に、新聞号外で、一日の天皇大葬に合わせて乃木希典大将夫妻が「殉死」したことを知る。上田は、その一四日夜にみた夢を田中親友夜学校『日誌』に記している。それは、乃木夫妻と死に装束の二人と上田がいて、皆で「殉死」しようという場面であった。しかし、上田は乃木に向かって「心静かに陛下三途のお供をして下さい」といいつつ、共に死ぬのを断っている。上田は、「余はまだ此の世に仕事が残って居る

（其の仕事とは夜学がまだしつかり整頓して居らぬ、講の話も中途新平民の開発事業が前途遼遠）」で、「三、四十年生きる、それがすんだら陛下の御前でお目にか、ろう」と乃木に語り「殉死」するのを断っている夢であった。楠木正成の地の出身である上田は、従容として俗世から離れて天皇の供をしたようにみえた乃木を賞賛しつつ、羨ましいと思ったのかこの奇妙な夢を記していた。

そして、上田が殉死よりも、夜学校などの問題解決が、自分にこの世で課せられた仕事だと、思いつめていたことがうかがえる。夢のなかだけでなく実際に、上田は、夜学校の存続に力を尽くすことを惜しまなかった。だが、上田のこの強い使命感は、善きことに尽力する自身への過信となり、彼の思いに同意しないものへの痛罵となっていく、田中部落の協力者たちとの関係に微妙な影を落としていった。

3 教育補助頼母子講の整理

教育講責任者の引継ぎの問題が未解決のままの、その年（一九一二年）十一月五日、早瀬らとともに、教育講の引継ぎの協議に参加していた世話人の一人が、自殺する事件が発生した。彼の自殺の原因は、彼が発起人となっていた間光寺維持講の講金二六〇〇円を使い込み、しかも返済不能となったからであった⁽⁷⁹⁾。

彼の自殺をきっかけとして、寺維持講だけでなく、湯屋講、消防講、道路講など各種頼母子講の不正が次々と摘発されていった。不

正金額は数万円にのぼるとされた。部落の生活がこのような危うい講からの利益で支えられていたのである。発起人たちの蒸発が相次ぐ。大規模・多数の講のため、講金払い戻しを要求する講員は、田中部落の人だけでなく、柳原部落や滋賀県からも田中部落に押しかけた。⁽⁸⁰⁾ 講不正事件はメディアに大きく採り上げられた。⁽⁸¹⁾ 多くの逮捕者がでたこの事件そのものは、一年後主犯二人の有罪判決で終結する。⁽⁸²⁾ そのうちの一人は、上田とともに醇成青年会の副会長を努めていた人物であった。田中部落は大揺れで、講組織そのものだけでなく、部落の土地そのものも、柳原に取りあげられるかと、報道されるほどであった。⁽⁸³⁾

そのなかで、教育講は浅井家が「資産を賭しても」⁽⁸⁴⁾ 講金を整理するとして、何とかこの異常時をくぐりぬけた。この間、上田はこれら一連の騒ぎについて、自殺事件のほかは記述を残していない。⁽⁸⁵⁾

浅井せいはい、言葉どおり、講の整理に着手している。そして、このとき初めて、せいはい、寺田清四郎に相談をしている。⁽⁸⁶⁾ せいの意向を聞いたのち上田も師走の二二日に寺田を訪問するが意見はまとまらなかった。だがこれ以降、夜学と講をめぐる問題に明石民蔵と寺田が重要人物として登場してくる。

一三年二月一八日、上田は、夜学校校舎の修繕について明石と寺田の三人で協議、費用や四〇〇円を夜学積立金と教育講から支出することを決めている。⁽⁸⁷⁾ 上田は二一日、早瀬にこのことを知らせ、早瀬は、休会状態の講からの支出に反対したが、これは事後報告みた

いなもので、後に早瀬は同意する。⁽⁸⁸⁾ ここから、せいが明石と寺田に講の実務を委任しているのが、わかる。三月五日、明石が来校、修繕の件の確認であろう。四月四日、一三年度の親友夜学校始業式に明石は「心眼二就きて」と題する講話をしている。校舎の修理も先月末に終了していた。

教育講は、浅井せいの下で整理が続けられる。結論をいえば、その努力はむくわれることはなく、せいはい、一四年八月二七日、ついに夜学の閉鎖を上田に申し出る。夜学校の存続問題は、その後も続く。それについては、後述するが、せいが寺田や明石の協力を得るようなかたちで講の整理を始めた一三年から一四年にかけて夜学校は、講問題に悩むのに追い討ちをかけられるよう、補助金停止を武器にした管理強化をめざす村当局との争いに翻弄されることとなる。この問題を通じて上田の憤怒は高まっていった。

4 村費補助金停止問題―その1

一三年八月三〇日、田中村長花井龍郎から、全村夜学に対する管理監督規定が制定されたゆえ、その規則書に夜学の責任者として同意の調印をするようにとの、書面が上田に回付された。それには、夜学の管理監督権は村長にあること、夜学教員は田中尋常小学校長の申し出に従い村長が「解除囑託」すること、夜学に裁縫部は設置しないことと規定してあった。明らかに、親友夜学校への管理強化をねらったものであった。上田は、「此の規則規定は村の公設夜学

ニ応用すべき規則にして我が夜学の如き私設の夜学に応用すべきものに「あらず」と捉え、講関係者と協議のうえ明後日に役場に出席・調印するとの理由をつけて、即日書面を村長宛に返却した。すると直ちに村長から公文書で補助金（年間二三円）の支払い停止が告げられてきた。補助金減額の動きはそれ以前にもあったが、これは全額停止を意味していた。「勝手に独立せらるべし」との村長の添え書きもあった。⁽⁸⁹⁾ここから事件が始まった。

八月三十一日、九月一日の両日、上田は村長に面会したが決裂。「よろし一厘の金も受けません独力でやります」⁽⁹⁰⁾と言い放ち席を立ち、その旨を渡辺竹次郎田中尋常小学校長にも報告した。そして、兼田義路郡長に面会を乞う手紙を出した。

上田の村長への反論は当然のことであった。他の夜学と同様にならない事情があるために、部落住民は、自分たちで夜学校を作り運営してきたのである。村は、国と府の方針でもある不就学問題解決のために、もつとも安価な方式をとっていたのである。それが、夜学校建設時には関与せずに、夜学校の財政基盤が揺れている最中に、その足元をすくうような補助金と規則のセット論であった。部落の子どもたちの就学条件整備に関する重要な意味をもつ問題であった。

村長の狙いは、子どもの教育問題などではなく、上田の、訓導らしからぬ行動、知事や郡長に話をもっていく、村長にとって、分限をわきまえぬ行動へ縛りをかけることにあった。七月に村長は、浅井せいに（村支給の夜学手当とは別個に）講から手当てを支給して

いないかを探るまでして、⁽⁹¹⁾上田批判の種を探し、上田の夜学校運営の実権を剥奪し、村長の下におきたいとする、官僚的発想であった。上田は、村長への反論のとおり、親友夜学校での教育と管理監督の在り方を、部落での教育の歴史と実態に基づいて、規則書が妥当性をもたないことを争うべきであった。が、縦割り社会の権限をふりかざす村長に激昂した上田は、夜学校の現実を語ることは空しいと断定したのか、本筋の論議には入らなかった。そして、田中親友夜学校「日誌」に執拗に記すように、上田は、自分の努力を軽んじ、果ては三円余計に欲しいのか、と蔑み、「上田の如き（給料―白石注）貳拾余の教員よりも郡一番の四十円の教員（田中尋常小学校長渡辺竹次郎―白石注）が来るから余程よい」と、夜学の青年たちに言い放つ、⁽⁹²⁾そんな村長の論調にあおられるように、田中尋常小学校長渡辺竹次郎をも巻き込んだの双方の人身攻撃の様相を呈していた。またその一方で、上田は味方である人びとが、自分の憤激と温度差があることにいらだっていた。

たとえば、村長は、言葉巧みに浅井せいと早瀬円蔵に規定書に調印させてしま⁽⁹³⁾うが、上田は驚くとともに、早瀬とぬいについて、次のように記している。「日々一丁字なき而も『理由も』名分明らかならざる会長を（村長が―白石注）独断的ニ選定し婦女子を攻めて強制的調印をなさしめ」⁽⁹⁴⁾。上田は、頼りにならない人たちを、侮蔑をこめて非難してしまっている。また、先の郡長への手紙が功を奏したのか、五日に郡役所で、郡長、郡視学、渡辺校長による協議が

もたれ、上田に次のような郡長伝言があった。「毀誉褒貶をなげ打ち君は彼の為に尽すにあらずや、兎に角一度彼の夜学をやれ、君を持て保護するは夜学をやる為なり、若し些々たる感情二走り夜学をやめることあれば、如何なる手数二出ずるやも知れず」と。⁽⁹⁵⁾上田はこの郡長伝言に、前半の郡長の上田擁護の言葉よりも、後半の「手数」とは何かと、そこに郡長の脅しを見てとる。そして、「如何なる鉄槌頭上」にくだつても、逆境に踏入りて一家を離散しても「余の在学来の素志は撓げぬ、余は免職となりても余の主義を貫かざれば此の地は去らぬ」。⁽⁹⁶⁾

孤立感と、そして、高揚感が募っていく。九月六日、上田は川島佐太郎郡視学に夜学校主任の辞任を申し出る。七日浅井宅に赴き、せいと、その場にいた寺田に、辞任とその理由を説明しているが、彼らの反応は記載されていない。⁽⁹⁷⁾八日、郡長・郡視学に辞任状を提出した。また、この日に、上田は東三条の協同夜学校を訪問し、私立学校の条件につき校長小西新太郎に、質問している。帰路、上田は、浅井と寺田の家で親友夜学校財産目録に付き尋ねている。積み立て金があれば私立学校になれると、上田の視野に私学化がはいってきた。⁽⁹⁸⁾一日、妻ぬいを含めた他の夜学校教員も辞任。しかし、ぬいは、「私の勝手で」裁縫を教えるから登校なさいと、女生徒に声をかける心遣いをしている。⁽⁹⁹⁾

夜学閉校となつても、現実には青年も児童もいるわけで、九月一日、郡役場は、浅井せい、早瀬、村長、校長を集め、郡長代理と川

島郡視学が協議、途中から上田も参加、結局、村長の金を受けなければと条件をつけて、上田は夜学校に復帰した。⁽¹⁰⁰⁾

この間も、村長・校長と上田といさかいは続いている。校長は、村長が、上田は部落民を教唆扇動しているといっているとか、⁽¹⁰¹⁾上田を「新平民と思ひ」身元調査をしていると、上田の耳に、⁽¹⁰²⁾後に言つた言わぬの口論までしている。

一方、一〇月一二日、上田は、柳原の明石宅を訪問し、内務省主催の第六回全国感化救済講習会に付き問い合わせ、一四日から東京へでかけ、同講習会で教育に関する経験談を発表しようとしていたのは、朝治論文のとおりである。

この間の夜学のスタッフがどのようなものであったか、上田は記載せず不明だが、経費はかかる。補助金停止のままでの運営は苦しく、渡辺校長からの、規定に従えという言葉に、浅井せいから、主張や理由・理屈はあるが、今の状態は如何ともいたし難いゆえ、「まげて御忍びを」と嘆願され、上田は受け入れる。⁽¹⁰³⁾これが一二月上旬のことである。その月末、つまり大晦日に、せいから、これまで上田一家が住んでいた夜学校舎の二階住居を、浅井家が教育講から四〇〇円で買い取ることにしたから、ついでには家賃月二四五〇銭を浅井宛に払ってほしいと申し込まれた承している。⁽¹⁰⁴⁾しかし、買取価格が不当に安いのは、浅井が私腹を肥やすためではないかと疑念をもつ。明けて一四（大正三）年正月二日、上田は浅井への新年回りの席上で、講運営の打ち合わせと共に夜学住居の買い取り価格の

根拠をせいに問いただし、この価格が早瀬との合議の末と知り、浅井が夜学住居転売の際に利益がでたら夜学に入金してくれる予定との言質をとっている⁽¹⁰⁵⁾。

一月二三日、役場で村長と校長に面会し補助金問題を協議した際に、浅井せいは、村長に謝罪することが問題決着の条件であると告げられ、その旨を上田に説得している。せいは、「あなたの謝罪が謝罪でない方便ですから」と懇願するが、上田は村長側の非を述べ、せいの願いを拒否、せいの仲介も今後無用と述べた⁽¹⁰⁶⁾。

5 村費補助金停止問題―その2

この事態を打開しようとしたのは、愛宕郡青年会支会の醇成青年会であった。代表として篠原重三郎・寺田清四郎が動いた。一月二七日、青年会は、親友夜学校の困難な状況の解決に、「中間二立チタリ」と断って村長と上田に交渉を始めた⁽¹⁰⁷⁾。寺田は、「今日の場合忍ぶ不能ざるも、何卒先生の主張をまげて村長の言ふがままになし置かれたし黒白は何れ判明せん。只堪忍の二字をお守りあたし」と上田に我慢するように説得した。青年会は中間に立つといいながら、上田の姿勢に理解を示していたことは明白であったが故に、上田は寺田の説得に「答ふる言葉なく」、青年会の意に従うこととなった⁽¹⁰⁸⁾。

ところが、村長側は上田の謝罪を求めて譲らない。それに対し元元上田の味方であるが、「中間に立つて」と慎重にことを運ぼうと

していた青年会が反発、郡役所や村役場で交渉を活発に展開する。二月二六日「青年会有志生徒父兄」を集め村長・校長の無責任を非難、一二〇余名の署名調印を添えて、上田の留任と「夜学の良解決」を郡長あてに提出するにいたる⁽¹⁰⁹⁾。三月六日、浅井せいと寺田が郡長に面会、九日に関係者との会合を約束するが、その約束が再度延期されるうちに、今度は校長を除く田中尋常小学校全職員から上田の転任勧告書が提出された。理由は、上田の傲慢無礼なこと、長たる者を罵ることなど、要は態度が良くないということであった。上田は職員を前にして（校長に）扇動されたのかと詰問するが職員は無言である⁽¹¹⁰⁾。

三月一九日、郡長による関係者会合が郡役所でもたれた。席上、村長と校長と打ち合わせた郡視学から上田に謝罪の文書提出を求められるが、上田は拒否、上田に意見を求められた郡長は、上田の意見が至当と述べたという。何も解決しなかった、と上田は記したが、郡長の意向であったのか、三月二三日、校長から村の補助金支給再開が、校長を訪問した寺田に告げられた。校長は、これで夜学問題は解決だと述べ、言外に上田の謝罪云々は棚上げとすることを示唆した。だが、青年会出身の代用教員広崎政吉の手当ては半分とし、金額は従来の月額二一円一ヵ月分二二一円を月額一二二円に減額することとなったと、意趣返しというべき措置が告げられた⁽¹¹²⁾。同月三十一日、上田は府視学に面会、夜学の窮状を訴えているが、府視学は手続きを踏んで府補助を受けるとアドバイス⁽¹¹³⁾。翌四月一日、上田

は、せいと寺田を伴い府庁にでかけて、府の視学と協議しているか、⁽¹⁴⁾
その後、府補助に関する記述は見当たらない。

四月一四日には、村有志が渡辺校長不信任の勧告書を提出した。

このような一連の騒ぎをメディアが見逃すはずもなかった。四月一六日、毎日新聞記者が上田のもとにやってきた。そして、四月二日から三日にわたり「田中村夜学校問題の紛糾／補助金の停止」の見出しの記事が掲載された。円満な事件解決を望むとした記事の内容は、(上田への取材に基づいているのか)上田と教育講の歴史を中心に記され、明らかに上田たちの側に立っていた。⁽¹⁵⁾村長は毎日新聞社の支局に赴き、上田を「特殊部落」の出身者だから、性格を考慮せよといったことを同社員から聞いた上田は村長に抗議している。村長は否定したが、そのとき上田は「左様の事を言はるとせば我が出身地の名誉を毀損する」と村長に述べたことを記している⁽¹⁶⁾(上田が、「新平民」「特殊部落」という言葉を使っているのは注意すべきだが、それにもまして、このときの上田の記述に、ふいに露出する差別の意識の根深さが表われ驚かざるを得ない)。

この記事の後、事態は膠着状態のまま推移したようで、上田の事件への記述は極端に減少している。そして、六月には兼田義路郡長の依願退職、八月の村長改選と続き、いつのまにか補助金問題は沈静化していった。郡長退任の際、彼の夜学への協力に対してと、上田は餞別をもって謝意をあらわそうとするが、補助金問題で誠意が欠けていたとの意見が多数で取りやめとなった。⁽¹⁷⁾村長選挙では、立

候補予定者の競合の末に花井村長は立候補を断念していた。⁽¹⁸⁾

上田は、膨大なエネルギーを使って、彼の面目を守り、後世の私たちは、夜学校を行政の管理から自由にさせておきたいと願った彼の思いをみるができるが、しかし、この時点では、補助金問題は、夜学運営に関する重要な問題にふれることなく決着し、しかも結局は村当局の意向が果たされたこととなったといえる。そして八月、解決されないままにおかれていた教育講問題が最終局面を迎えていた。

八月二七日、上田は、浅井せいから夜学維持費皆無のため、九月から夜学を閉じたいとの申し出を受けた。⁽¹⁹⁾

四 親友夜学校維持教育講の終焉

1 教育講の破綻

夏季休暇を郷里で過ごし、その間に富田林の新堂部落の改善事業を視察して八月末に帰京した上田を待っていたかのように、浅井せいが訪ねてきた。用件は夜学維持費が皆無のため九月から親友夜学校を閉じたいという申し出であった。翌二八日、上田は青年会と相談のうえで学校を維持すること、新学期も始めることなどを、せいに告げた。この日の日誌に、「夜学の現状ハ講会整理の不調ニ就き、既ニ校舎を抵当として壹千七百円の負債アリ」と上田は初めて記している。⁽²⁰⁾上田にとって、初耳であったと思われる。講が困難な状態に

あることは承知していても、校舎が抵当に入っていたとは。借金額の多さから言つて、夜学補助のための借金というより、教育講自体の赤字補填のための借金であることは明白であつた。しかも、上田が借金の先を知るのは、一年後のことであつた（後述）。

夜学の危機打開のため、上田は、九月九日、夜学維持講の有力者とおぼしき人びとに、「諸賢の御援助如何ニより」学校統行の運命がかかっていると記された書面をもつて、一二日の協議会出席を呼びかけた。⁽¹²²⁾ 教員である上田が、教育講の問題に関わらざるを得ない事態であつた。だが、出席者は寺田などわずかに四名にすぎず、流会。⁽¹²³⁾ 翌一三日に講世話人と、青年会の会合を持つとするが、出席者は一名で、これも流れた。⁽¹²⁴⁾ 部落内の教育状況は、入学者は多数となつたが、卒業するのは、五%にすぎない。この現状を「傍観」し、校舎が抵当にはいつている「浮雲」の如きものに一〇銭の金もだしたくないというような、そんな関係者の態度を批判、「実二慨嘆の至りに堪へざるなり」と記している。⁽¹²⁵⁾ 一六日の世話人会も流れた。

ついに上田は、一八日、浅井せいに談判に出かけ、せい個人で、教育講の借金二〇〇〇円（元金一七〇〇円＋利子三〇〇円）を支払うことを要求した。せい夫妻は驚愕。せいは講の他の役員の無責任さを非難、せいの夫は、姻戚だからといつても迷惑だと反論した。だが、上田はそれは承知のうえだとひるまない。二〇〇余名の児童が不就学となり、無学の徒となれば部落改善はできない、父清三郎の苦心を無にするのか、父は安心して永眠できないと、せいに詰め寄

り、ついに、次のように言い放っている。親友夜学校が廃絶となれば、「浅井父子は貧民を種々使ひ、慈善を笠二かぶり、救済を標榜して講法を結び、何の成す所なく只自己の腹中を肥やせし者なりと言はん」「永遠貴家は細民怒府の中心とならん」。上田は、清三郎の死去直前の表彰が、うまくいかなかったのも、「其の筋はやはり疑念を以て注目し居れたり」とまで言つた。

じつと聞いていたせいは、父のためにも今日まで講を維持してきたこと、しかし、提供する財産するなど今はないと、反論している。しかし上田は、金がない生活とは思えぬ、講元として浅井家は、貸付の手数料を取つていたであらう、手数料を取りすぎたと思つて金を捻出せよと迫つた。そして、そうすれば、清三郎が功労者として記録されることを約束しようと述べた。⁽¹²⁶⁾

脅しともとれる談判であつた。夜学校維持のためには、ともに尽力した浅井清三郎まであえて中傷する、なりふりかまわぬ上田の姿であつた。

次に上田は、浅井せいに、支会醇成青年会へ教育講を提供させることを青年会で協議、寺田などを提供勧告委員に決めるが、（当日欠席していた）寺田は、理由がわからぬといひ、また行動に移した形跡はなかつた。⁽¹²⁷⁾

一方で、上田は講法条令について研究を始めた。そして、せいに、これまでの講関係の会計報告をするように要求。⁽¹²⁸⁾ 翌一五年二月二二日に出納明細表を入手するが、簡単すぎるとしてもっと詳しいもの

を要求している。三月五日、明細書を催促する上田に、せいから月末までの猶予を申し出られ、三月三〇日にやっと入手する。田中親友夜学校『日誌』に掲載されているのが、その明細のすべてであるかどうか今のところ不明である。これだけであつたなら、講の内容ははつきりしない。ただ、せいが講元となつた最終講である第七講には、それ以前の講から多数の入金がなされていることがわかる。

それぞれの講は完結していなければならないはずで、この経理操作の意味がわからない。講の経理については、私は残念ながら分析できず、また部落の講自体が、のちに水平運動で問題提起されるにいたる複雑な操作がなされるものが多かつたといわれ、私はこの明細書を判読することはできていない。

この間も、講は持続しているわけで、ついには、これまで夜学補助として使われていた上田の家賃二円五〇銭も、講会維持のために使われることとなり、講からの夜学補助は皆無となつた。⁽¹³⁰⁾三月一日、上田は、柳原に明石民蔵を訪ね、せいから明石に引き継がれていた4つの教育講からの出金を打診した。明石はそれらの講は債権回収が不十分のため赤字で、損害を受けていると言ひ、上田の期待ははずれた。このとき、上田は夜学に対する明石の債権について尋ねている。夜学校舎を抵当に金を貸したのは明石ではないかと上田は思ったのであろう。その答えは記載されていない。⁽¹³¹⁾

三月三十一日、村からの補助金が月五円復活した。だが、五月三日、田中尋常小学校から、校舎修理の間、田中部落からの本校児童だけ、

親友夜学校で授業を受けさせたいと申し出があり、差別だと抗議するが、結局はそのとおりとなつた。⁽¹³²⁾

このころには、上田は、負債の半分をせいに負担してもらい、あと半分は講関係者で調整する方針を固め、せいに打診した。四月七日の夜学関係者に諮り、了承を受けた。実は、上田は講関係負担は、田中村の富豪、たとえば西園寺公望らにも寄付してもらおうと、いささか甘い算段をしていた。⁽¹³³⁾上田は前田千賀良愛宕郡長との面会を取り付け、その計画を述べたが、寄付に頼るなど指摘される。ただ上田は、郡長に、夜学の協議には出張する旨の約束を取り付けた。⁽¹³⁴⁾七月一七日の、郡長列席のうえでの協議をへて、二四日、せいが一〇〇〇円、部落内から一〇〇〇円の方針が決まった。部落内での負担調整を請け負うという人物があらわれていたが、田中親友夜学校『日誌』でも「秘密」とされている。⁽¹³⁵⁾

七月三〇日、田中親友夜学校『日誌』に、夜学校舎抵当の経緯が記された。一九一三（大正二）年二月一五日、明石からせい（教育講）が、二二〇〇円を借り、その担保とされたのである。利子は月一八円九〇銭。なぜか同日四〇〇円が返却され、残高一七〇〇円（利子月一五円三〇銭）である。⁽¹³⁶⁾この時期は、せいが、夜学二階を教育講から買い取った時期と重なる。せいは、教育講として二一〇〇円借金して、教育講から校舎二階を、四〇〇円で浅井家が買い取るかたちで、その金を明石に返金したのか。

部落内での調整は、教育講のうち、せいから運用を任されていた

人たちが四人が、八月二三日に最終講の決算を終えて負担することになった。負担する人たちから不公平だとの不満もあり、借金返金督促された者からは、恐喝まがいの目にあうが、自分(137)は中立だと自認する上田は、ひるまない。それどころか、上田は、警察にでかけ、警察が、警察としてではなく仲裁として講関係者四人の事情聴取をせよと依頼、警察はその四人と上田を召喚、彼らに負担を合意させている。(138) 五条警察署長から愛宕郡長となった前田のアイディアなのか、上田は強引な手法をとったといわざるを得ない。関係者に不満は残ったが、一〇月五日、細目が決定した。(139) 負債一七〇〇円、利子三〇〇円、講終末整理に二〇〇円、計二二〇〇円。負担は、せい夫妻が、家産売却して一二〇〇円、講関係者四人が九〇〇円、明石が一〇〇円寄付である。七日、借金は返済された。夜学は従来はせいの教育講の所有であったが、教育講は満了となり、夜学は、講の借金の肩代わりの出金をした、せい、せいの夫、教育講関係者四名、それに明石の七名の共有と、一〇月八日、登記された。(140)

2 親友夜学校、再出発への模索

八日の田中親友夜学校『日誌』に、上田は「本日は何たる吉日ぞ、十年来の夜学宿題解決せり」と記している。『夜学校沿革史』によれば、同日、次の二項が「上田夜学校主任及び関係者合名各員相互の間」に公約として、取り決められた。一、夜学校維持費は町村費をもって支出すること、二、「親友夜学校存置上」の公約として、

夜学校校舎・備品一切を私事のため、または教育事業以外に使用しないこと、教育上必要と認めた場合は、夜学校全部を公共に提供することが決まった。

取り決めの内容は、明らかに町村費支給の引き換えに、夜学校の使用について制約をつけ、しかも町村の使用要請に応じなければならぬというものであった。公約を取り交わした関係者に町村関係者が含まれていたことをうかがわせる。また、その内容は、校舎二階で住む上田一家へ向けられている。

それまでの村当局の態度から分かるように、夜学校を管理下におこうとする意図が実現したといえる。部落の人びとが作った夜学校を行政は、無償で入手したようなものだった。だが上田の田中親友夜学校『日誌』には、この『夜学校沿革史』記載の事項は記されていない。上田が、夜学校二階から引越しをした形跡もない。上田は、『夜学校沿革史』のこの時点の別欄に「明治三十九年以来茲に十カ年当夜学校を完全に成立せしむる事を得たり」と記している。その文意は、行政に無償ではあるが提供したようなかたちである夜学校が、教育行政の傘の下で維持されていくことへの彼の安堵を表しているかに見えるが、実はそうではない。

講借金の解決への道筋が見えてきた九月七日、上田は府庁で、私立学校出願手続きを調査している。講問題が解決した後、上田は親友夜学校の私立学校化を目指していたのである。協同夜学校の調査、夜学関係者との協議、郡・府当局との折衝を重ねていった。田中親

友夜学校「日誌」をたどると関係者の理解が乏しいまま、一月二日

六日、上田は平井次之田中村長を代表者名として、愛宕郡学務掛に私立夜学校設立申請書を提出する。申請書と返答書そのものが残っていないので内容は分からないが、二七日付で、同掛から平井村長あてに、私立学校は義務教育にそぐわないこと、学校運営のための費用の大半を村からの補助に頼るのは私立学校の基礎薄弱として、申請書が返却されてきた。平井はその旨を上田に伝え再考を促している。だが二八日、上田は今度は、京都府視学の西原光太郎あてに、「私立親友夜学校設立認可申請意見書」を提出した。⁽¹⁴⁾彼は、田中部落児童の未だ解決されない就学問題にふれ、私立夜学校設立の理由として、部落の生活状態からみて、夜間の授業が児童にとって好都合であること、村立田中尋常小学校に夜間部を作っても通学に不便であること、親友夜学校を村が買い取り、あるいは借用して、本校の分教場とする場合には、現行夜学の所有者の権利との調整が困難であろうと述べている。そして、学校維持については、村内の学齢児童だから村から補助がなされるであろうし、万一それがなくても、設立者たちの力でやっていける、私立形式にしても幹部は村の幹部を据えて協同してやっていける、とした。

上田は、視学宛の意見書末尾に、「今や同部落民ハ覚醒ノ期ニ臨メリ有志奮然立ツテ学校設立ヲ唱フルニ至リシ、此ノ期逸スベカラズ」と記したが、しかしそれは、上田の願う部落有志の姿であった。現実には、上田が一番知っていただろう。

教育の価値を最優位に置く上田は、教育状況確保のためには、手段を選ばない言動を取ってきた。上田は、奮闘しているが、しかし夜学校の危機に四名しか集められなかったのも、事実であった。上田は学校の危機の事態に対し、一〇銭の金を惜しむような人びとの態度をなげいていた。だが生活の総てが教育である上田と異なり、一部の有力者を除いて人びとは一〇銭の金にも細心の注意を払って生活をしなければならない。夜学校に対する双方の温度差の中で、親友夜学校は、運営主体は村の管轄に、ジワジワと押し込まれていた。部落民の学校を目指して諦めぬ上田は私立夜間学校設立に邁進していたが、その危うい楽天的見通しに、日誌をみる限り賛同する動きはみえない。一九一六（大正五）年にはいっても上田は私立夜間学校設立に固執しているが、二月十九日、（私立）夜学設立の交渉は成功せず、郡役所の意向に「一先づ」沿うということで、私立夜間学校設立の試みは終わった。⁽¹⁴²⁾

彼は、部落の子どもの教育は部落が主体となっていなければならないという、教育行政への不信と、部落の人たちの奮起への期待と、自分がやってきた実績への自信があったといえる。そして、協同夜学校が京都市教育会の組織の下に私立校として運営されていることがモデルとして描かれていたのだろう。だが、京都市内の伝統ある慈善学校との条件の違いを上田は検証していない。浅井清三郎亡きあと、教員の仕事だけでなく、学校経営の仕事までが、上田の仕事となった。その過重な職責と、容赦ない行動。そんな中で、児童の

就学の奨励に責任ある行政は、夜学校の支援よりも、夜学校の支配に力を入れた。そして、夜学校関係者の疲労と諦めを引き出していたようだ。

3 田中親友夜学校との別れ

教育講問題、補助金問題、私立夜間学校設立問題と、難問に關わっている中も、上田の教員としての仕事は続いていた。『夜学校沿革史』に、児童数は、一九一〇（明治四三）年度、一七七名、一三年度、一〇一名、一二年度、一五〇名、一三年度、一六〇名、一四年度一二二名、一五年度一二〇名を数えた。上田が述べるように、卒業する児童は少なかったが、これだけの子どもたちを上田は学校に迎えたのである。

私立学校問題が頓挫したあとも、上田は柔道場を新設し、生徒たちに訓練の重要性などを訓示している⁽¹⁴³⁾。また児童労働の保護について岩坪金箔工場長と、学齡児童を労働させる場合は親友夜学校で義務教育を終了させること、工場から夜学校に月一〇円を教育費として支払うことを約束させている。そして、工場長と上田は相互に視察している⁽¹⁴⁴⁾。

だが、日誌にも明らかのように、学校関係の記事は途切れ途切れとなり、一方で部落改善運動へ傾倒していった。前述のように、明石から、内務省主催「第六回感化救済事業講習会」の情報を得て、所用で京都に帰るまで参加したのが、上田にとって初めての全国規

模の部落改善に関する集会であった。拙稿「明治末期における部落改善運動の二つの道―京都柳原を中心に―」⁽¹⁴⁵⁾に記したように、明石たちの同志会運動と、大江天也の帝国公道会は、運動方針が異なる。大江らは、同志会運動を配下に置くべく運動を展開していき、明石らも最後にはそれに包摂されていたが、一六年三月五日、柳原尋常高等小学校で開催された「関西同志懇談会」は、〇三（明治三六）年に大阪で開催された「大日本同胞融和会」の精神を継いだものであった。そこで採択された決議は、政府と国会に、部落改善をせまる画期的なものであった。この会に参加した上田は、しかし、彼の記す「夜学校沿革史」に、同志会の議題とひとつとして、同志会の決議になかった「殖民地移住に関する件」を記載、しかも「殖民地移住問題白熱化す」とコメントしている。上田は、明らかに、大江ら帝国公道会の路線に踏み出していった。それは、同時に田中部落からの、親友夜学校からの別れを意味していた。

北海道移住に関する記事が多く見える一六年の十一月一七日、上田は田中村立田中尋常高等小学校訓導を依頼退職する⁽¹⁴⁷⁾。上田は、前月三〇日から北海道にゆき、同月一八日帰京していることから推して、出発前に退職届けを提出したのであろう。上田が京都府庁から退職の辞令を受け取るのは一月二〇日とある⁽¹⁴⁸⁾。二月一日に、夜学関係者との会合。一日、前述の金箔工場に赴き、そこで働く児童へ就学証明書を与えるとの記事で、この年の、そして親友夜学校教員としての田中親友夜学校「日誌」が終わっている⁽¹⁴⁹⁾。

おわりに

一九〇〇年前後に顕著となった就学督励の動きは、明治末期にいたり、不就学児童は数%に過ぎないまでとなっていた。本稿は、その数%の不就学児童の中に含まれていた部落の子どもたちに、教育の機会を作って奮闘した親友夜学校とその教師上田静一の動きを追ったものである。国や京都府の就学督励の機運の下での動きであったが、その内実は、今まで記してきたとおりであった。府や村の支援は最小であり、それすらも管理・統制と一体とされた。上田という人物と教育補助無尽頼母子講の成功という幸運に恵まれて形成された親友夜学校が、維持展開するために行政の支援が必要となったときの、教育行政の有り様は、子どもの教育機会確保の観点から程遠いものであった。親友夜学校の事例は、就学督励の諸法令・府令の教育現場での具体的様相であったというよう。

親友夜学校の、上田辞任の以降の動きは、公文書には記されず、また新聞報道もなされることはなかった。一〇〇名を越える、残された在校生の処遇が問題とされなかったのは、夜学校が、村の補助の下に、本校の分教場として引き継がれたことを推測させる。すでに上田が去ったあとの夜学校で学んだ古老の話もある。しかし読み書きが不自由な大人や子どもたちが、第二次世界大戦後も、部落に数多くいたことを考えると、その後の親友夜学校は、上田たちの

思い描いた役割を果たせたとはいえないだろう。

田中部落は、その後水平運動の中心のひとつとなり、部落の体制・秩序は大きく変化していく。だが人びとの心には、夜学校とともにあった上田の姿があった。

一九三七（昭和一二）年、様々な思想信条や社会的立場の人びとは、親友夜学校敷地の一角に、上田の記念碑を設立する。石造りの碑は、二つある。ひとつは縦約二メートル、横一・五メートルで表に「報恩記念 上田静一先生之碑」と大書され、裏面に「昭和十二年五月 田中親友夜学校同窓会建之」とある。もうひとつは、横長の「建碑之趣意」と題されて、碑建設の趣旨が漢文で記されてある。末尾に京都市田中親友夜学校同窓生一同とある。ふたつの碑建設への経緯は不明だが、「建設之趣意」⁽¹⁵²⁾で記されている上田の姿は、夜学校創立時の青年教師上田であった。人びとは、「学ブ生徒教ユル先生薄暗キらんぶノ下ニ一如トナリテ勉学ニ精魂ヲ傾ケシ吾等」と記している。夜学校の危機に、手段をえらばぬ方策に奔走する上田の記憶ではなく、思い出されるのは、ともに学んだ教場での上田であった。そして「建碑之趣意」の漢文のうえには、「師弟一如」（夜学校の教育精神三項のひとつ。前述）と彫られている。

石碑建設の資料となったと思われる『夜学校沿革史』に、上田もまた、「明治三十九年十一月本夜学校開始より今日に至るまで十三年、満十ヶ年三ヶ月此の間当校に教へを受けた者八百余人」と、誇らしげに記している。

- (1) 『京都府百年の資料 五 教育編』(京都府、一九七二年) 四三五～四三六頁。
- (2) 同上書、四三六～四三八頁。
- (3) 教育史編纂会『明治以降教育制度発達史』(以下、『発達史』と略す) 第四卷(教育資料調査会、一九三八年) 四五頁。
- (4) 「上田静一と田中親友夜学校」『京都部落史研究所報』第三三、三五号(一九八〇年九月～十一月)、その後「上田静一・親友夜学校と北海道移住」(解放教育史研究会編『被差別部落と教員』(明石書店、一九八六年)に加筆し所収)。
- (5) 『発達史』第一卷、二七五～三三八頁。
- (6) 『部落解放と教育の歴史・明治篇』(『大阪市教育研究所紀要』第一二八号、一九七三年) 及び、『近代公教育の成立と差別教育』(鈴木祥蔵他編『講座 部落解放教育』第2巻、明治図書、一九七八年)において、私は、明治期の教育制度をたどり、その教育制度の改変は、貧しい子どもたちのための条件整備の方向ではなく、変則学校、小学教場、簡易科と正規の課程とは格差のある環境を許可するだけのものであり、しかも、部落の児童はそこから振り落とされていった状況を詳述した。土方苑子『東京の近代小学校―「国民」教育制度の成立過程』(東京大学出版会、二〇〇二年)は、「貧富」だけではない(封建時代の社会的関係をひきずった)当時の社会の「重層性」を記し、近代教育行政貫徹の困難さへの目配りをした。また、『普通教育』の低度(ミニマム)普及を、就学奨励の制度的整備で跡づけた三原芳一は、「財政的見地を重んずる路線」は、「いきおい漸進主義的なものとならざるを得なかった」と記した(『一九九〇年代の学齢児童不就学とその変容』(本山幸彦教授退官記念論文集編纂委員会編『日本教育史論叢』思文閣出版、一九八八年)等。また、佐藤秀夫は、「学校観の成立―小学校における課程編成の形成過程を中心として」(『教育の文化史1・学校の構造』(阿吽社、二〇〇四年)で、政府

- が国民皆教育を求めて社会階層・民度に対応して薄く広く初等教育課程の多元化を追及した「民度適応」の学校観と、「立身治産」「階層上昇」を期待する民衆側の学校観との食い違いを克明に記している。これらの論文は、教育行政を取り巻く状況を、拙稿には不足していた視点から叙述して、興味深い。
- (7) 安川寿之輔「義務教育就学の史的分析」(『日本の教育史学』第七集、一九六四年)。また土方の前掲書、三原芳一「明治後半期の就学奨励と学齢児童統計―関西三府県を素材に―」(『全国地方教育史学会紀要「地方教育史研究」第六号、一九八五年五月」等。本稿では、就学率の算出方法への言及は保留し、先行研究の数値に沿っていく。
- (8) 前掲三原論文「一九九〇年代の学齢児童不就学とその変容」に詳しい。
- (9) 佐藤秀夫前掲書、六〇頁。
- (10) 文部省大臣官房総務課編『歴代文部大臣式辞集』(大蔵省印刷局、一九六九年)一〇九頁。
- (11) 『教育時論』第五一四号(一九九九年七月二五日)
- (12) 田中勝文「児童保護と教育、その社会史的考察―東京市の特殊小学校設立をめぐって―」(『名古屋大学教育学部紀要』第二二巻、一九六五年九月)。
- (13) 『大阪毎日新聞』一九〇二年一月二日、四月二六日、二七日
- (14) 『京都日出新聞』一九九九年一〇月一七日、二四日。『京都小学五十年誌』(京都市役所、一九一八年) 八二～八六頁。但し、日付に誤りがある。
- (15) 『京都日出新聞』一九〇〇年九月二日、二五日。
- (16) 前掲『京都小学五十年誌』八六頁。
- (17) 前掲『京都府百年の資料 五 教育編』四三七頁。
- (18) 『発達史』第四巻、五二頁。
- (19) 拙稿「模範」的融和教育の一例―八幡尋常小分教場の誕生と解体―(『京都部落史研究所報』第三〇号、一九八〇年六月)。ただし、同府訓令と分教場での作業の開始の時間的関係は史料的に明確に断定できていない。なお、このような就学形態として有名

- なのに、東京・万年小学校における坂本龍之介の「特別手工科」一九〇五年がある。加登田恵子「わが国における貧民教育—東京市特殊尋常小学校の成立と展開—」(『社会福祉』第二十三号、一九八三年三月)。
- (20) 障害児・者に対する教育の詳細は、荒川勇他「日本障害児教育史」(福村出版、一九七六年)を参照。
- (21) 伊藤和男「日露戦後—大正期の京都における義務教育の動向」(前掲『日本教育史論叢』思文閣出版、一九八八年)二〇〇頁。
- (22) 八箇亮仁「地方改良期の教育状況—京都・奈良の被差別部落を中心に—」(『講座日本教育史』第三巻、第一法規出版、一九七四年)には、日露戦後経営期の部落の教育状況が、部落対策事業の進展を踏まえて論じられている。
- (23) 『報恩記念碑建設趣意書・田中親友夜学校沿革史』(一九三七年一月) 京都部落史研究所編『京都の部落史』9 (阿吽社、一九八七年)所収。以下「夜学校沿革史」と略す。なお「夜学校沿革史」は、上田の田中親友夜学校「日誌」を中心に、後日上田自身が記したものと考えられる。
- (24) 「親友夜学校有功者略歴名簿」(『京都府田中村調査書類』)。
- (25) 同上「親友夜学校有功者略歴名簿」。
- (26) 上田静「追懐」(ガリ版刷・私家本) 一九二七年、総頁数五〇頁。
- (27) 上田静「峯城幸平妻ます略傳」。
- (28) 前掲註(25)に同じ。
- (29) 『京都日出新聞』一九一一年五月二二日。
- (30) 『京都市養正尋常高等小学校・学校沿革史』第一巻。
- (31) 「親友夜学校関係者略歴」(前掲「夜学校沿革史」五一頁所収)。
- (32) 前掲註(30)に同じ。
- (33) 京都府愛宕郡役所編『洛北誌・旧京都府愛宕郡村志』(大学堂書店、一九七〇年)五〇—五一頁。
- (34) 「大阪朝日新聞」京都附録、一九一四年六月一日。
- (35) 「明治三十五年貧民部落調査」(『府庁文書』)。
- (36) 「大阪朝日新聞」京都附録、一九〇九年一月六日。
- (37) 「大阪朝日新聞」京都附録、一九〇九年一月二一日。
- (38) 「浅井清三郎氏ノ功績調査ノ慈善教育講ノ創立」(『京都市編入町村引継書類ノ上司進達書類綴』愛宕郡田中村役場)。
- (39) 「大阪朝日新聞」京都附録、一九〇九年一月二一日。
- (40) 「日出新聞」一八九四年一月一四日。
- (41) 「発達史」第四巻、六七頁、一〇七頁。
- (42) 「京都日出新聞」一九一一年五月二二日。
- (43) 前掲「親友夜学校関係者略歴」。
- (44) 前掲「京都市養正尋常高等小学校・学校沿革史」。京都女子和洋技芸学校は、一九〇二年五月に開校(『大阪朝日新聞』京都附録、一九〇二年五月二五日)。主宰者のフロー・メリーは、「幼きイエズス修道会」のシスターで同技芸学校を天主教育院の院長を兼任。親友夜学校児童も彼女の支援を受けていたのは、田中親友夜学校「日誌」にも明らかである。なお、シスター・メリーの死は、一九二二年八月六日付の「大阪朝日新聞」の計報欄で報じられた。享年七五歳。
- (45) 「京都日出新聞」一九〇九年七月一〇日。
- (46) 「大阪朝日新聞」京都附録、一九〇八年二月二〇日。
- (47) 「京都日出新聞」一九〇八年一月二三日。
- (48) 「大阪朝日新聞」京都附録、一九〇八年二月二〇日。
- (49) 他に五回にわたり、私立協同夜学校、私立酬恩夜学校などについて記されている。
- (50) 田中親友夜学校「日誌」一九〇九年六月四日条。
- (51) 田中親友夜学校「日誌」一九〇九年五月四日条。
- (52) 田中親友夜学校「日誌」一九〇九年六月四日条。
- (53) 前掲「夜学校沿革史」。
- (54) 「京都日出新聞」一九〇九年五月二二日、田中親友夜学校「日誌」一九二三年二月三一日条。
- (55) 田中親友夜学校「日誌」一九〇九年一月二七日条。
- (56) 「町村引継書類」会議一件「田中村・明治四二年度」(『京都の部落史』第七巻、阿吽社、一九八五年、四三九頁)。
- (57) 前掲「京都市養正尋常高等小学校・学校沿革史」。

- (58) 『大阪毎日新聞』 京都滋賀附録、一九一四年四月二二日によれば、月額二円を(夏季休暇の八月を除く)一ヵ月分の二二円。
- (59) 『大阪毎日新聞』 京都滋賀附録、一九一四年四月二二日、上田洋一氏(静一の孫)談。
- (60) 前掲『追懷』二七頁。
- (61) 同上、二七、二八頁。
- (62) 田中親友夜学校『日誌』一九〇九年六月二九日条。
- (63) 田中親友夜学校『日誌』一九一一年九月五日条。
- (64) 田中親友夜学校『日誌』一九一一年四月六日条。
- (65) 『京都日出新聞』一九一一年五月二二日。
- (66) 田中親友夜学校『日誌』一九一二年五月二四日条、七月一四日条。
- (67) 田中親友夜学校『日誌』一九一二年五月二六日条。
- (68) 田中親友夜学校『日誌』一九一二年明治七月三日条。
- (69) 田中親友夜学校『日誌』一九一二年六月三日条。
- (70) 田中親友夜学校『日誌』一九一二年七月七日条。
- (71) 田中親友夜学校『日誌』一九一二年七月一五日条。
- (72) 田中親友夜学校『日誌』一九一二年七月一六日条。
- (73) 田中親友夜学校『日誌』一九一二年七月一七日条。
- (74) 田中親友夜学校『日誌』一九一二年七月二八日条。
- (75) 田中親友夜学校『日誌』一九一五年三月末に記載されてある「慈善夜学講貸借対照表」参照のこと。
- (76) 田中親友夜学校『日誌』一九一二年七月二九日条。
- (77) 田中親友夜学校『日誌』一九一一年九月一〇日条、一三日条。
- (78) 飛鳥井雅道『明治大帝』(講談社、二〇〇二年)一一六三頁に、この暑い夏の出来事が詳述されている。乃木希典の「殉死」をめぐる世評と、乃木家のその後については、井戸田博史「乃木希典殉死・以後―伯爵家再興をめぐる―」(新人物往来社、一九八九年)に詳しい。
- (79) 『大阪朝日新聞』 京都附録、一九一二年一月二九日、二月一四日。
- (80) 『大阪朝日新聞』 京都附録、一九一二年二月一五日。
- (81) 『大阪朝日新聞』 京都附録、一九一二年二月二〇日、二二日、一九一三年一月二二日、一九一三年五月一八日。『京都日出新聞』一九一三年九月一八日。
- (82) 『京都日出新聞』一九一三年一月一六日、『大阪朝日新聞』京都附録、一九一三年一月一六日。
- (83) 『大阪朝日新聞』 京都附録、一九一三年五月一八日。
- (84) 『大阪朝日新聞』 京都附録、一九一三年二月一五日。
- (85) 田中親友夜学校『日誌』一九一二年一月一五日条、一六日条、二〇日条。
- (86) 田中親友夜学校『日誌』一九一二年二月二〇日条。
- (87) 田中親友夜学校『日誌』一九一三年二月一八日条。
- (88) 田中親友夜学校『日誌』一九一三年二月二六日条。
- (89) 田中親友夜学校『日誌』一九一三年八月二六日条、三〇日条。
- (90) 田中親友夜学校『日誌』一九一三年九月一日条。
- (91) 田中親友夜学校『日誌』一九一三年七月二七日条。
- (92) 田中親友夜学校『日誌』一九一三年九月一六日条。
- (93) 田中親友夜学校『日誌』一九一三年九月五日条。
- (94) 田中親友夜学校『日誌』一九一三年九月六日条。
- (95) 田中親友夜学校『日誌』同上。
- (96) 田中親友夜学校『日誌』同上。
- (97) 田中親友夜学校『日誌』一九一三年九月七日条。
- (98) 田中親友夜学校『日誌』一九一三年九月八日条。
- (99) 田中親友夜学校『日誌』一九一三年九月一日条。
- (100) 田中親友夜学校『日誌』一九一三年九月一八日条、二二日条。
- (101) 田中親友夜学校『日誌』一九一三年九月二九日条。
- (102) 田中親友夜学校『日誌』一九一三年一〇月二日条。
- (103) 田中親友夜学校『日誌』一九一三年二月四日条。
- (104) 田中親友夜学校『日誌』一九一三年二月三一日条。
- (105) 田中親友夜学校『日誌』一九一四年一月二日条。
- (106) 田中親友夜学校『日誌』一九一四年一月二三日条。
- (107) 田中親友夜学校『日誌』一九一四年一月二七日条、『醇成青年会日誌』一九一四年一月二七日条。
- (108) 田中親友夜学校『日誌』一九一四年一月二九日条。

- (109) 田中親友夜学校『日誌』一九一四年二月二六日条。
- (110) 田中親友夜学校『日誌』一九一四年三月六日条、七日条、一一日条、一三日条。
- (111) 田中親友夜学校『日誌』一九一四年三月一九日条。
- (112) 田中親友夜学校『日誌』一九一四年三月二三日条。
- (113) 田中親友夜学校『日誌』一九一四年三月三十一日条。
- (114) 田中親友夜学校『日誌』一九一四年四月一日条。
- (115) 『大阪毎日新聞』京都滋賀附録、一九一四年四月二二日、二三日、二四日。
- (116) 田中親友夜学校『日誌』一九一四年四月二七日条。
- (117) 田中親友夜学校『日誌』一九一四年六月一四日条、一七日条、一九日条。
- (118) 田中親友夜学校『日誌』一九一四年八月二八日条、『大阪朝日新聞』京都附録、一九一四年八月一七日、一八日、二九日。
- (119) 田中親友夜学校『日誌』一九一四年八月二七日条。
- (120) 田中親友夜学校『日誌』一九一四年八月一九日条、二七日条。
- (121) 田中親友夜学校『日誌』一九一四年八月二八日条。
- (122) 田中親友夜学校『日誌』一九一四年九月九日条。
- (123) 田中親友夜学校『日誌』一九一四年九月二二日条。
- (124) 田中親友夜学校『日誌』一九一四年九月一三日条。
- (125) 同上。
- (126) 田中親友夜学校『日誌』一九一四年九月一八日条。
- (127) 田中親友夜学校『日誌』一九一四年九月二一日条、二三日条。
- (128) 田中親友夜学校『日誌』一九一四年一〇月三日条。
- (129) 『京都日出新聞』一九一三年四月二〇日に京都府の講取締りの記事がある。朝田善之助「新版 差別と闘いつつけて」(朝日新聞社 一九七九年)。
- (130) 田中親友夜学校『日誌』一九一五年一月一一日条。
- (131) 田中親友夜学校『日誌』一九一五年三月一三日条。
- (132) 田中親友夜学校『日誌』一九一五年五月三日条。
- (133) 田中親友夜学校『日誌』一九一五年大正五月二七日条。ちなみに、西園寺公望は一九一三(大正二)年三月に田中村に別邸を新築し

- ていた(『京都日出新聞』一九一三年三月二三日)。
- (134) 田中親友夜学校『日誌』一九一四年五月三一日条。
- (135) 田中親友夜学校『日誌』一九一五年七月二四日条。
- (136) 田中親友夜学校『日誌』一九一五年七月三〇日条。
- (137) 田中親友夜学校『日誌』一九一五年八月二四日条、九月一日条。
- (138) 田中親友夜学校『日誌』一九一五年九月三日条、四日条。
- (139) 田中親友夜学校『日誌』一九一五年一〇月五日条。
- (140) 田中親友夜学校『日誌』一九一五年一〇月八日条。
- (141) 『京都親友夜学校建設及河内楠公夫人遺跡再興二関スル書類』
- (142) 田中親友夜学校『日誌』一九一六年二月一九日条。
- (143) 田中親友夜学校『日誌』一九一六年六月六日条、一二月二五日条。
- (144) 田中親友夜学校『日誌』一九一六年一二月八日条、九日条。金箔工場の正式名は岩坪五兵衛商店(創業は正徳二年)の金銀箔鋳造工場である。同商店は、一九一六年五月に田中村に工場を新設した(『大阪朝日新聞』京都附録、一九一七年五月三十一日)。「京都日出新聞」一九〇七年六月二日に同商店の紹介記事がある。
- (145) 『京都部落史研究所紀要』第一号、一九八一年三月。
- (146) 『同志懇談会記事』(明治之光)第五卷四月号、一九一六年四月)。
- (147) 前掲『京都市養正尋常高等小学校・学校沿革史』第一卷。
- (148) 田中親友夜学校『日誌』一九一六年一二月二〇日条。
- (149) 田中親友夜学校『日誌』と時期的に一部重なるように、上田は、一九一六(大正五)年一〇月三〇日から別の『日誌』を書き綴っている。一〇月三〇日は、上田が始めて北海道に向けて京都を出発した日である。この『日誌』は、一九三四(昭和九)年五月まで続く。「上田静一日誌」として、『京都部落史研究紀要』第三号(一九八三年三月)一九八五年三月に所収。
- (150) 賛助者三四名・団体名は、前掲『夜学校沿革史』に記載されている。
- (151) 前掲拙稿「上田静一と田中親友夜学校」を執筆した一九八〇年には、二つの碑とも、親友夜学校跡地に並んで立っていた。だが、今回再調査にいくと、「報恩記念 上田静一先生之碑」は、京都市養正学習施設脇に移設されていた。「建碑之趣意」碑は、以前

の場所辺りにあり、本来二つでひとつのものが別の場所にあるという状態である。その理由は定かでない。

(152) 前掲『夜学校沿革史』所収。

【追記】

上田静一が教育実習を愛宕郡鞍馬口尋常小学校で実施したことに関し、「上田が教育実習先に貧民部落といわれた同（鞍馬口―白石注）

小学校を選んだ経過は不明だが、」と記した（二二頁の上段七行目から八行目）が、校了後、「鞍馬口の阪口先生」（『京都日出新聞』一九一〇年三月二七日）によって、その当時、鞍馬口尋常小学校が京都府師範学校の「貧民教育研究の目的」で「附属校」となっていたことが判った。ここから上田は、鞍馬口小学校の教生となった経過が判明したことを付記しておきたい（二〇〇八・一二・二四記）。

（しらいし まさあき・元佐賀大学教員）